

[B年] 聖霊降臨節第20主日(2026年10月4日)**【旧約聖書日課】 出エジプト記 32章7～14節**

⁷主はモーセに仰せになった。「直ちに下山せよ。あなたがエジプトの国から導き上った民は墮落し、⁸早くもわたしが命じた道からそれて、若い雄牛の銅像を造り、それにひれ伏し、いけにえをささげて、『イスラエルよ、これこそあなたをエジプトの国から導き上った神々だ』と叫んでいる。」
⁹主は更に、モーセに言われた。「わたしはこの民を見てきたが、実にかたくなな民である。¹⁰今は、わたしを引き止めるな。わたしの怒りは彼らに対して燃え上がっている。わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする。」¹¹モーセは主なる神をなだめて言った。「主よ、どうして御自分の民に向かって怒りを燃やされるのですか。あなたが大いなる御力と強い御手をもってエジプトの国から導き出された民ではありませんか。¹²どうしてエジプト人に、『あの神は、悪意をもって彼らを山で殺し、地上から滅ぼし尽くすために導き出した』と言わせてよいのでしょうか。どうか、燃える怒りをやめ、御自分の民にくだす災いを思い直してください。¹³どうか、あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたは彼らに自ら誓って、『わたしはあなたたちの子孫を天の星のように増やし、わたしが与えると約束したこの土地をことごとくあなたたちの子孫に授け、永久にそれを継がせる』と言われたではありませんか。」¹⁴主は御自身の民にくだす、と告げられた災いを思い直された。

【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 6章4～12節

⁴一度光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかるようになり、⁵神のすばらしい言葉と来るべき世の力とを体験しながら、⁶その後に墮落した者の場合には、再び悔い改めに立ち帰らせることはできません。神の子を自分の手で改めて十字架につけ、侮辱する者だからです。⁷土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ農作物をもたらすなら、神の祝福を受けます。

⁸しかし、茨やあざみを生えさせると、役に立たなくなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

⁹しかし、愛する人たち、こんなふうに話してはいても、わたしたちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いにかかわることがあると確信しています。¹⁰神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになるようなことはありません。¹¹わたしたちは、あなたがたのおのおのが最後まで希望を持ち続けるために、同じ熱心さを示してもらいたいと思います。¹²あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束されたものを受け継ぐ人たちを見倣う者となってほしいのです。

【福音書日課】 マルコによる福音書 14章43～52節

⁴³さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。⁴⁴イエスを裏切ろうとしていたユダは、「わたしが接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。⁴⁵ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。⁴⁶人々は、イエスに手をかけて捕らえた。⁴⁷居合わせた人々のうちのある者が、剣を抜いて大祭司の手下に打ってかかり、片方の耳を切り落とした。⁴⁸そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。⁴⁹わたしは毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」⁵⁰弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。

⁵¹一人の若者が、素肌に亜麻布をまとい、イエスについて来ていた。人々が捕らえようとする、⁵²亜麻布を捨てて裸で逃げた。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

出エジプト記 32章7～14節

⁷主はモーセに告げられた。「急いで下りなさい。あなたがエジプトの地から導き上った民は墮落してしまっただ。彼らは早くも私の命じた道からそれて、子牛の鑄像を造り、これにひれ伏し、いけにえを献げ、『イスラエルよ、これがあなたの神だ。これがあなたをエジプトの地から導き上ったのだ』と言っている。」⁹主はモーセに言われた。「私はこの民を見た。なんとかたくなな民だろう。¹⁰私を止めてはならない。私の怒りは彼らに対して燃え、彼らを滅ぼし尽くす。しかし、私はあなたを大いなる国民とする。」¹¹モーセは自分の神、主をなだめて言った。「主よ、なぜあなたの怒りがご自分の民に燃えるのですか。大いなる力と強い手によってあなたがエジプトの地から導き出された民ではありませんか。¹²どうしてエジプト人に、『あの神は悪意をもって彼らを導き出し、山の上で彼らを殺し、地の面から滅ぼし尽くした』と言わせてよいでしょう。燃える怒りを収め、ご自分の民に下す災いを思い直してください。¹³あなたの僕であるアブラハム、イサク、イスラエルを思い起こしてください。あなたは彼らに自ら誓い、『私はあなたがたの子孫を増やして空の星のようにする。また、私が約束したこの地をすべて、あなたがたの子孫に与え、とこしえにこれを受け継がせる』と告げられました。」¹⁴それで主は、ご自身の民に下すと告げた災いを思い直された。

へブライ人への手紙 6章4～12節

⁴⁻⁵ひとたび光に照らされ、天からの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、神のすばらしい言葉と来るべき世の力を味わいながら、⁶後に墮落した者たちは、再び悔い改めへと立ち帰ることはできません。神の子を自分でまたも十字架につけ、さらし者にしているからです。⁷土地は、度々その上に降る雨を吸い込んで、耕す人々に役立つ作物をもたらすなら、神の祝福にあずかります。

⁸しかし、茨やあざみを生えさせるなら、無用なものとなり、やがて呪われ、ついには焼かれてしまいます。

⁹しかし、愛する人たち、こうは言うものの、私たちはあなたがたについて、もっと良いこと、救いに関わることがあると確信しています。¹⁰神は不義な方ではないので、あなたがたの働きや、あなたがたが聖なる者たちに以前も今も仕えることによって、神の名のために示したあの愛をお忘れになることはありません。¹¹私たちは、あなたがた一人一人が、同じ熱心さを示して、最後まで希望を持ち続けてくれるよう願っています。¹²あなたがたが怠け者とならず、信仰と忍耐とによって、約束を受け継ぐ人たちに倣う者となるためです。

マルコによる福音書 14章43～52節

⁴³そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二人の一人であるユダが現れた。祭司長、律法学者、長老たちの遣わした群衆も、剣や棒を持って一緒に来た。⁴⁴イエスを裏切ろうとしていたユダは、「私が接吻するのが、その人だ。捕まえて、逃がさないように連れて行け」と、前もって合図を決めていた。⁴⁵ユダは、やって来るとすぐにイエスに近寄り、「先生」と言って接吻した。⁴⁶人々は、イエスに手をかけて捕らえた。⁴⁷そばに立っていた者の一人が、剣を抜いて大祭司の僕に打ちかかり、片方の耳を切り落とした。⁴⁸そこで、イエスは彼らに言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕らえに来たのか。⁴⁹私は毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたがたは私を捕らえなかった。しかし、これは聖書の言葉が実現するためである。」⁵⁰弟子たちは皆、イエスを見捨てて逃げてしまった。⁵¹一人の若者が、素肌に亜麻布をまとしてイエスに付いて来ていた。人々が捕らえようとする、⁵²亜麻布を捨てて裸で逃げた。

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・10月4日「聖霊降臨節第20主日」の日課主題は「執り成し」。

・旧約日課は、「出エジプト記」から、「金の雄牛事件」の説話」中の一場面。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、キリスト者として成長した者が目指すべきことを勧める箇所。福音書日課は、「マルコによる福音書」から、主イエスがユダの手引によってとらえられたことを伝える箇所。

旧約日課(出エジプト 32 章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」全五巻の第二巻に位置づけられる歴史物語文書。「申命記」まで続く「モーセ物語」の第一部を構成し、前半(1～18章)は、モーセが主の召命を受けてエジプトから人々を導き出し始められた旅の初期までを、後半(19～40章)は、シナイ山に辿り着いた一行がモーセを通して「十戒」をはじめとする「律法」を受けられ、主の指示によって「幕屋」を建設して約束の地を目指す旅を始める備えを進めるまでのことを扱っている。

・日課箇所は、本書後半部で扱われる「幕屋」建設に関する記述の中途に挟まれた「金の雄牛事件」の説話物語(32～34章)中の一場面。「金の雄牛事件」は、モーセらがシナイ山上で主から律法を告げられ、その「掟」を記された「石の板」を受けられている間に、彼らを山の麓で待つ人々がモーセの兄アロンに求めて「金の雄牛」を造り祭りを始めるが、戻って来たモーセによって首謀者らの粛清が行われた上で、モーセが再びシナイ山に登り、破壊してしまっていた「石の板」に代わる「戒めの板」を記して戻るまでの一連の出来事を指す。本書構成上、この説話物語(32～34章)は長大な「幕屋建設に関する指示」の記述の途中に割り込むように置かれているが、これが挿話であることを明示するように本物語の直前の箇所(31:12～17)と直後の箇所(35:1～3)には「安息日に関する指示」が置かれている。

・日課箇所中で、モーセは、雄牛の像を造って祭りをする人々を滅ぼすという主の意思を聞き、それを思いとどまらせるために執り成し、最終的に主に思い直していただくことを実現している。ところが、この物語の展開においては、続く箇所で麓の人々のもとに戻った後、モーセは、事件に関与した者たちを粛清した上で(32:25～28)、あらためて主に民が犯した罪を赦してもらうために執り成しをしたことが描かれる(32:30～34)。このような展開の重複も踏まえて、日課箇所の一部が後から付加された叙述であると考えられる学者もいる。

・他方で、主の「わたしは彼らを滅ぼし尽くし、あなたを大いなる民とする」(10節)という発言は、日課箇所が、一連の物語の中で描かれる「アロン」の立ち位置や粛清を通しての「レビの子ら」の選抜という事柄を理解する上で、重要な役割を果たしていると考えられる。

・「アロン」は、「モーセ物語」中で最初からモーセの協力者として登場する彼の「兄」であり、「幕屋建設」の関連で「祭司」として指名されている存在でもあり(28:1以下)、旧約正典で一貫して「唯一正統な大祭司の家系」の祖に位置づけられる人物である。他方で、モーセは、旧約正典全体を基礎づける「律法授与者」として唯一無二の存在と位置づけられながら、彼自身の子孫については、わずかな例外的な記述(士師記 17:30)を除いて、ほとんど知られていない。奇妙なことに、このモーセの子孫に関するほとんど唯一の記述(同)に描かれるのは、ダン族が移住した先の町(ダン)で独自に祀られた「ミカの造った彫像」のための祭儀を執り行う祭司として仕え続けたという伝承である。この「ダン」については、「列王記」が、ソロモン王死後に「ユダ」から分離して「イスラエル王国」を率いたヤロブアム王が、聖所「ベテル」と共に「金の子牛像」を建立して王国礼拝所に定めたとも描いている(王上 12:28～30)。つまり、「金の雄牛像」がアロンではなくモーセと結びつく可能性を示している。ところが、更に奇妙なことには、本書の「金の雄牛事件」では、モーセの従う者たちとして「レビの子ら」が選ばれたという伝承が加えられて、旧約正典中で「祭司」と共に無視できない存在として描かれる「レビ人」の権威付けがモーセに帰されている。旧約正典の編纂に携わった者たちが、モーセの系譜に属する祭司集団に主導権を握ったアロン系の祭司集団だったとすれば、彼らは、「レビ人」の支持を得るために、自分たちの祖である「アロン」を取って格下げすることも辞さずに「モーセ」を唯一無二の存在として権威付けすることを意図していたのかもしれない。

使徒書日課(ヘブライ 6 章より)

・「ヘブライ人への手紙」については、過去の資料「聖書と祈りの会 260729」「同 260916」など参照。

・日課箇所は、本書が、3～10章で展開する「大祭司キリスト論」に基づく贖罪神学の論述を一時的に中断して、読者に注意を促す勧めを告げている箇所(5:11～6:12)の一部である。

・日課箇所は、一度救われた者が信仰を捨てたならば再び悔い改めに導かれることはない強い口調で告げながら、後半では、その警告を緩和し、神が別のご計画によって救われる可能性があることを示唆している。日課箇所の前段でも示されているように、ここに置かれている一連の勧めは、信仰的な「怠け者」となることを戒め、「教えの初歩を離れて、成熟を目指して進」(6:3)むように励ますことを目的に記されている。ただし、このような勧めがここに置かれているのは、5:11 に記していることが示唆するように、本書で展開している論述を理解することが困難であったり、聞くこと自体を拒んだりする読者(信者)に対して、忍耐して聞き、理解するように促すためである。本書が展開する贖罪神学は、基礎となる教理というよりは、組織化されつつある新しい神学課題だったのだろう。

福音書日課(マルコ 14 章より)

・日課箇所は、「受難物語」中、主イエスがユダの手引によって逮捕されたことを伝える説話箇所。四福音書が共通して伝えており、共通の伝承を元に各福音書が再構成しているものと推認される。

・43節の状況設定は、この出来事が前段で描かれていた「最後の祈り」の場である「ゲッセマネという所」(32 節)で起こったことを示している。「マタイ」は、同様にこの場所を示しているが(マタイ 26:36)、「ルカ」は「オリーブ山」とだけ示し(ルカ 22:39)、「ヨハネ」は「キドロン谷の向こう」に位置する「園」としている(ヨハネ 18:1)。ここが主イエスと弟子たちにとって繰り返し利用していた場所であったことを、「ルカ」と「ヨハネ」は示しているが(ルカ 22:39、ヨハネ 18:2)、「マタイ」と「マルコ」は触れていない。しかし、主イエスと弟子たち一行が食事の後にそこに向かうことを「ユダ」は知っていたからこそ、捕える者たちをそこに案内することができたということを踏まえれば、「マタイ」と「マルコ」も、そこが彼らにとって少なくとも既知の場所であったことは前提にしていると言える。

・「ユダ」は、「裏切ろうとしていた」者という訳で示されているが、この語はギリシア語「パラディドーミ」で、一連の「受難物語」で繰り返し用いられ、「引き渡す」または「裏切る」の訳語が充てられている。前段、41 節「引き渡される」および 42 節「裏切る者」も同じ語。広義の「受難物語」は、主イエス自身による予告(8:31)から展開するが、二度目の予告(9:31)以降、この語が用いられて「人々の手に引き渡され」ることから始まる出来事として描かれている。「ユダ」は、その「引き渡し」に必要な役割を負わされた存在として位置づけられているのであり、必ずしもユダ個人の「裏切り」行為に焦点が当てられているわけではない。「マタイ」は、この「ユダ」が自分の行為を後悔して自殺したと伝え(マタイ 27:3~10)、「ルカ」の続巻である「使徒言行録」も、「ユダ」がその行為の報いとして死んだことを伝えているが(使徒 1:18~19)、「マルコ」と「ヨハネ」は、そのようなユダの受けた報いを語っていない。

・50 節「弟子たちは皆」の原文直訳は「皆」(パンテス)。「弟子たち」は、「マタイ」の表現に合わせて補われている。

・「マルコ」は、この場面の終わりに「一人の若者」に関する独自の伝承を記している。51~52 節の直訳は、「また、彼に従って来た若者が裸に亜麻布をまとっていたが、彼を捕えようとする者たちがいたので、亜麻布を置いて裸の者として逃げた」。この「若者(ネアニスコス)」について、他の福音書は伝えないが、「マルコ」は、「空の墓」伝承に「若者」を登場させている(16:5)。他方で、教会伝承では、この「若者」は「使徒言行録」に描かれる「ヨハネ=マルコ」という人物で、バルナバを通してペトロの付き人兼通訳となり、そのことがきっかけでペトロから聞いた主イエスの伝承をまとめて本福音書を著したとされている。

来週の誕生日 (10 月 4 日~10 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-18「心を高くあげよ！」(=Ⅱ1)は、コロサイ 3:1~4 に基づく伝統的な聖餐祈禱冒頭の「スルスム・コルダ SURSUM CORDA」(「心を高く上げなさい」との呼びかけに対して、「わたしたちは心を高く上げます」と応答)に基づく讃美。作詞者バトラーは 19 世紀英国教会の司祭で、自分が校長として勤める学校の讃美歌集のために作詞。作曲者スミスは 20 世紀米国聖公会の司祭。

・21-127「み恵みあふれる」は、19 世紀フィンランド・ルーテル教会信徒でフィンランド文学の教授クローンが自らも携わった讃美歌集に収録した讃美歌。曲は、フィンランドの伝統旋律から採られた。WCC の 1974 年版讃美歌集に採用されて広まった。

・21-376「人の知恵と言葉を超え」は、フィリピンの作曲家フィリシアーノが作詞作曲。フェリシアーノはマニラでアジア典礼・音楽研究所を主宰し、アジアの伝統的な音楽を礼拝に用いる取り組みを率先している一人。『21』では、豪州聖公会司祭ミンチンが敷衍した英語版から翻訳して収録。

21-18「心を高くあげよ！」***Lift Up Your Hearts! We Lift them, Lord, to Thee***

1. 'Lift up your hearts!' We lift them, Lord, to thee; / here at thy feet none other may we see: / 'lift up your hearts!' E'en so, with one accord, / we lift them up, we lift them to the Lord.
2. Above the level of the former years, / the mire of sin, the slough of guilty fears, / the mist of doubt, the blight of love's decay, / O Lord of light, lift all our hearts to-day.
3. Above the swamps of subterfuge and shame, / the deeds, the thoughts, that honour may not name, / the halting tongue that dares not tell the whole, / O Lord of truth, lift every Christian soul.
4. Lift every gift that thou thyself hast given: / low lies the best till lifted up to heaven; / low lie the bounding heart, the teeming brain, / till, sent from God, they mount to God again.
5. Then, as the trumpet-call in after years, / 'Lift up your hearts!' rings pealing in our ears, / still shall those hearts respond with full accord, / 'We lift them up, we lift them to the Lord!'

21-127「み恵みあふれる」***Herrasta Veissa Kieleni******English Translation******O sing my soul, your Maker's praise***

1. O sing my soul, your Maker's praise / In grateful hymns ascending; / Whose steadfast love has crowned your days / With heav'nly gifts un ending. / I sought the Lord, He heard my cry; / His holy angels hover nigh / The tents of those who love Him.
2. The Lord is good to those who seek / His face in time of sorrow, / Providing comfort to the weak / And grace for each tomorrow. / Though grief may tarry for a night, / The morn shall break in joy and light / With blessings from His presence.
3. The Lord will turn His face in peace / When troubled souls draw near Him; / His loving kindness shall not cease / To those who trust and fear Him. / Our God will not forsake His own; / Eternal is His heav'nly throne; / His kingdom stands forever.